

平成26年度 入学試験問題

国語 A

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は50分間です。
3. 問題は ～ までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
6. この問題冊子にも受験番号、氏名を書きなさい。

受験番号

氏 名

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

声楽を志す御木元玲（私）は、音大附属高校の受験に失敗し、新設の女子高の普通科に進んだ。二年生になった玲は、合唱コンクールで受験の時に歌った曲を指揮することになった。だが、練習で厳しい指示を出す玲に同級生から反発の声が上がった。

「この際だからいわせてもらおうけど」

中溝^{みぞ}さんが私のほうを見ずに続けた。

①「こんな練習、楽しくないよ」

それはまじめに練習をしないからだ。私のせいじゃない。ちゃんと練習をして、それをみんなで合わせるから楽しくなる。最初から、何から何まで楽しいことなんて、あるだろうか。そう思ったけれど、まともに議論する気にはなれなかった。

「じゃあどんな練習をしたいの。どんな練習なら楽しいと思うの」

「どんな練習っていわれても困るけど……音楽って楽しいものなんですよ。勝ち負けは関係ないんじゃないかな」

音楽つて楽しい。勝ち負けじゃない。――たしか何度目かの練習のときの私の言葉だ。思った通りに声が合ったときの気持ちよさを話した。個々のおもむきの思惑など軽々と超えて広がっていくのが音楽というものだと、何かそんなことを練習の合間に話した。気が緩んだのだろうか。恥ずかしげもなくそんなことを話した私も私だけれど、それを逆手に取って得意げに突きつける中溝さんもひどい。彼女は休んでばかりで、たしかそのときも来ていなかったはずだ。誰か参加していた友達に又聞きでもしたのだ。

② いい返そうとする気持ち膨らみかけて、すぐに萎んだ。私の言葉がどんなふうに伝えられたのだろう。それを考えると、そのときだけでも気

やめてもよかった。みんな汚れたシャツだと思った。だからわからないのだ。ほんとうは合唱が楽しいことも、私の言葉も、きつと永遠に通じないだろう。指揮を降りてしまえば楽になれる。でも、降りなかった。あの歌を歌う以上、最後まで見届ける責任がある。

まともでないまま合唱コンクールに出た。歌は一本調子だし、緊張したのかピアノはいつも以上にミスばかりだし、こんなに恥ずかしい舞台^{ぶたい}には二度と立ちたくないと思ったほどだ。

拍手はまばらで、もちろん賞には入らず、舞台を降りて体育館の客席に
戻った私たちには満足感のかけらもなかった。クラスの一体感など生まれ
ようもない。それでも、ともかく終わった。これで、あの歌とはお別れだ。
受験と合唱コンクール、ふたつも緩のついたあの歌を、もう歌うこともな
いだろう。体育館に並べられた椅子にすわり、私は今日のこともぼんや
りの膜にくるんで忘れてしまおうと思った。それであとはまたぼんやりと
した日々に戻るだろう。

私の望みどおり、ぼんやりはすぐにこの手に戻ってきた。合唱コンクールとその前後の、苛立ちも恥もいざこざも、すべてなかったことのように穏やかな日々。そのうちにまた次の行事がやってくるのだ。——マラソン大会だ。次は、初冬のマラソン大会だった。（中略）

その日が近づくにつれ憂鬱になる。正門を出発して住宅地を抜け、大きな橋のたもとに出たら川べりの道に戻ってくる。七キロ弱のコースになる。運動部でよほど鍛えてでもない限り、走り通せるわけがない。しかも、やっと学校に戻ってきててもそこが終点ではない。ゴールを盛り上げるためか、グラウンドをさらに一周することになっている。あの一周が特につらい。ほとんどの生徒がゴールしてしまい、あちこちにすわって談笑している前を、ひとりで最後まで走る。体力的にも精神的にもきつい一周だ。

を許したことが悔やまれた。ここでいい返してもしかたがない。それに、勝ち負けじゃないはずの音楽に、落ちるという言葉を使ったのは私自身だった。

やめようか、と思った。指揮など初めからやりたくなかった。合唱コンクールにも興味はない。自分には関係がないと思つていたくらいだ。それなのに、^③やるからには、などいつのまにか思つてしまつていたらしい。そういう執着^{しやくちやう}とは縁^{えん}を切つたつもりだった。自分で自分の気持ちがつかめない。私を見捨てた声楽を見返してやろうという気持ちが混じつていたのだろうか。こんなことで見返せるとは思つていないし、見返せるはずもない。もしも私が素晴らしい合唱をつくり上げることができたとしたつて、それと声楽とは何の関係もない。じゃあ、どうして。どうして意気^{いこ}込んでしまったのだろう。興味も熱意もないふりを続けながら、その実、なんとか上手に仕上げてみせようと考えていたなんて。それでどうしようというのか、何のためにがんばっているのか。

——好きだから。歌が、合唱が、好きだから。浮かんできてよとする答
えを無理やり閉じ込めて蓋をする。好きただけじゃ駄目なのだ。才能がな
ければ結局はみじめな思いをすることになる。

そのとき、小さな声がした。

「もうちよつと、みんな、気持ちを合わせようよ」

ピアノの前に原さんが立ち上がっていた。

「こ、声を合わせるっていうのは、こつ、こつ、こつ、こつ、こつを合わせるっていうことから——」

こつ、こつ、こつ、こつ、こつ。そんなに緊張しなければ同級生たちのころも少しは動かされたかもしれない。教室はしんとして、それからくすくすと笑い声が起こき、原さんは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

(申略)

スタートした時点ですでに足が重かった。ガンバロウ、と肩を叩いてくれた佐々木さんがはるか前方へ飛び出していく。ジャージ姿の生徒たちには混じって短パンの元気な子がいると思えば意外にも原さんだ。校門を出たあたりで私はもう最後尾のグループにいた。早くも息が上がっている。脇腹が痛い。どう足掻いてもこのままビリを走ることになるだろう。すぐに私は走るのをあきらめて、脇腹をさすりながら早足で歩く。あつというまに周りに誰もいなくなつた。ときどき前方にジャージを見たけれど、すぐにまた見えなくなってしまう。住宅地を抜け、橋の傍らで折れて川沿いを走る。歩く。走る。歩くほうが多い。息が苦しい。

何をやっているんだろうと思う。今ごろは歌を歌っているはずじゃなかったか。こんなところを息を切らして歩いたり走ったりする代わりに、音楽と取っ組みあつていたかった。肩で息をして歩く。もはや早足とさえいえない。のろのろと足を進めながら、見上げた土手にススキが風に吹かれていた。ススキに呼ばれるように、ふらふらと川のほうへ道を外れる。荒い息を整えながら、低い土手を上る。向こうは灰色の大きな川だ。その流れを眺めるうちに、不意に自分が今どこにいるのかわからなくなってしまう。今の私は X からずいぶん遠い場所に立っている。そのことだけは、手で触れることができるくらいはつきりとわかった。(中略)

校門をくぐると、すでに備品の後片づけをしている生徒や先生が目に入る。私のすぐ横を伴走^{ばんそう}していた自転車^{せきでんしゃ}がそこでようやく止まる。

「フアイトフアイト！ もう一息だ！」

かろうじてうなずいてみせる。足がもう前に出ない。まだこれからグラウンドを一周しなければならんなんてつらすぎる。自転車置き場の横を過ぎ、体育館の裏手を通り、やっとグラウンドが見えてくる。ジャージの

生徒たちが散らばっている。その明るい場所へ、私は一向に近づいていかないような気がする。走っているのか歩いているのか自分でもわからない。足は上がっているのか、地を這っているだけなのか。それより、この心臓はだいたいどうぶなのか。耳か、頭か、もしかすると目の奥が、ガン、ガン、と規則正しく鳴っている。このガンはラ。ドレミファソラ、の、ラだ。そんなことがわかったってなんにもならない。絶対音感なんてどこかへ行ってしまえ。

汗だくになって走りながら、私の目はトラックの茶色しか見ていない。私の耳は、ガン、ガン、ガン、——と、それからかすかな旋律をとらえる。どこからか、歌が聞こえる、ような気がする。最初はひとつの声。か細い、頼りない旋律だったのが、次第に声が集まって大きく力強くなっていく。幻聴？ ではない。荒い息と心臓の鼓動と耳鳴りと、それらを超えて歌が聞こえる。何の歌だかわからなかった。ただ、いつか聞いたことのある歌だと思った。顔を上げて、あたりを見る。足がふらつき、視界が揺れる。その隅に、ジャージの一团がかたまっているのが見える。ふたり、三人と集まってくる。まんなかにいるのは短パンの小柄な生徒だ。

はつとした。まさか、と思う。これはもしかして、あの歌、だろうか。あの、私たちが合唱コンクールで歌った歌。最後までうまく歌えなくて、それどころかクラスが全然まとまらず、わずかな自信までなくしていた。あのときの歌とは、まるで別の歌に聞こえる。でも、たしかにあの歌だ。こんな歌だったのか。こんなに素朴で、いきいきと生きるよろこびを歌った歌だったとは。若草が薫り、雲雀が舞う空の下で、若い田舎娘たちが裸足で戯れながら歌を歌っている。トラックを走りながら、目の前にその光景が浮かぶようだ。

⑥ 私はまったく考え違いをしていた。歌わせよう、歌わせようとした。

問い一 —— 線①「こんな練習、楽しくないよ」とありますが、なぜ中溝さんはこのように発言したのですか。その理由を説明した次の文の [1]・[2] にあてはまる言葉を、本文中からそれぞれ五字以内でぬき出しなさい。

・音楽は本来 [1] であるべきなのに、玲が [2] にこだわっていると感じたから。

問い二 —— 線②「いい返そうとする気持ちが萎んだ」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～エから選びなさい。

ア 中溝さんのするどい意見に反論できる自信がなかったから。
イ 自分の気持ちは中溝さんにはとうてい通じないと思ったから。
ウ 自分に反発する中溝さんの相手をするのにうんざりしたから。
エ 中溝さんのもつともな意見を素直に聞き入れようと思ったから。

問い三 —— 線③「やるからには」について

(1) 「やるからには」の後ろにはどのような言葉が省略されていますか。十五字以内で本文中からぬき出しなさい。
(2) なぜ玲はこのように思ったのですか。その理由が書かれた一文を本文中から探し、その最初の五字を答えなさい。

問い四 —— 線④「私は今日のことともう忘れてしまおうと思った」とありますが、玲は、「今日のこと」以外に、どのようなことを「ぼんやり」の膜にくるんで忘れようとしてきたのですか。「～のこと」に続くように、本文中から言葉をぬき出しなさい。

問い五 [X] にあてまる二字の言葉を本文の () の中からぬき出しなさい。

技巧を重視して、歌う動機も気持ちも置き去りにした。薄暗い教室で、譜面から目を離さず、注意ばかり飛ばして歌わせる歌では決してなかった。聴かせよう、感動させようと歌う歌でもない。これは、まぎれもなく彼女たちの歌、そして私たちの歌だ。

足が震えそうだった。胸が高鳴っている。マラソンのせいばかりではない。曇る目に、原さんが映っている。牧野さんも柴崎さんも、中溝さんもいる。歌のはじまりに私たちは立ち会っている。ここにいるみんなが、何もなかったこの場所に歌のはじまるところを確かに見た。

⑦ もともと、歌のはじまりはこういうものだったのかもしれない。よろこびや、祈りや、誰かに届けたい思いを調べに乗せる。同級生たちが私に向かつて——おそらくは学校一、足の遅い私を励ましたために——いつのまにか声を合わせたように。その自然な感情の高まりこそが歌だったんじゃないか。足を引きずり涙を拭いながら私は走っている。歌声が大きくなる。あと少しで、ゴールだ。

(内容を一部省略し、表記を改めました)
【宮下奈都「よろこびの歌」】

注 汚れたシャツ：玲は、本文とは別の場面で、さまざまな行事の中

でさりと役割を果たす同級生たちを「真っ白に洗い上げられたシャツ」に、自分自身を「着古されたまま洗い直されていないシャツ」にたとえている。

問い六 () の部分における表現上の特徴の説明として最も適当なものを次のア～エから選びなさい。

ア 「低い土手」や「灰色の川」といった風景描写によって登場人物の気持ちを効果的に描き出している。
イ 心の中の言葉を間に入れながら、マラソン大会で走る様子を登場人物の視点から描き出している。
ウ 場面の变化にしたがって移り変わっていく登場人物のきめ細かい心の動きを、客観的に描き出している。
エ 擬音語や擬態語を多く用いることで、登場人物が走る様子をリズムカルに描き出している。

問い七 —— 線⑤「はつとした」とありますが、玲はなぜ「はつとした」のですか。その理由として最も適当なものを次のア～エから選びなさい。

ア かすかに聞こえていた旋律が、合唱コンクールで歌った歌だと気づいたから。
イ 同級生たちがゴールで自分を待っていてくれたことに気づいたから。
ウ 鼓動や耳鳴りの音だと思っていたものが、実は歌声であることに気づいたから。
エ あれほど何度も練習したはずの曲を自分が忘れていたことに気づいたから。

問い八 ――線⑥「私はまったく考え違いをしていた」とありますが、

ここでの玲の「考え違い」の内容の説明として最も適当なものを次のア～エから選びなさい。

ア 合唱コンクールで歌った歌を、厳しい練習を重ねないと上手に歌えないような技巧的な歌だと思っていたこと。
イ 合唱を、歌い手と指揮者が心を合わせて作るものではなく、自分ひとりの力で作り上げるものだと思っていたこと。
ウ 合唱においては、歌い手や聴き手を感動させることよりも、技術的にすぐれた演奏であることが大切だと思っていたこと。
エ 合唱コンクールの歌が失敗に終わった原因は、自分ではなく同級生の態度や取り組む姿勢にあると思っていたこと。

問い九 ――線⑦「もともと、歌のはじまりはこういうものだったのかもしれない」について

(1) 玲はどのようなことがきっかけで、このことに気づいたのですか。本文中の言葉を用いて、三十五字以内で説明しなさい。
(2) ここで玲は「歌」をどのようなものだと考えていますか。本文中の言葉を用いて、十五字以上二十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①そこに行かないと見えないものがある。

宇宙空間で地球を眺めながら、僕はそう感じたものでした。「地球は青かった」という有名な言葉があります。人類初の宇宙飛行士となったユーリ・ガガーリンの言葉です。ガガーリンは一九六一年に旧ソ連が打ち上げた有人宇宙船に乗り、一時間四十八分の宇宙飛行を行いました。彼の初飛行からおおよそ五十年経ったいま、その言葉を裏付けられるかな、青く輝く地球の写真や映像が、宇宙ステーションや衛星から送られます。現代に生きる僕たちにとって、地球が丸く青いことはもはや常識です。

地球の写真を見ると、とてもきれいだと感じます。なんてすばらしい星なのだろう、と。A、宇宙空間に漂いながら地球を見たときに感じた

現実感、写真を通して感じる美しさとはまるで違っていました。

本物が持つ美しさや、リアリティが持つ力は、実際にそこに行ってみて体験しないと伝わらないのです。

B 美しい高山植物の写真を見たとき。実物そっくり、いや、本物そのものにも思えるかもしれません。きれいだな、と感じ「この花が咲き続けられるように、自然を大切にしないといけない」という思いが湧くでしょう。でもそこで止まってしまったら、本物の持つ美しさはわからないまま終わってしまいます。

では、その花を見るために標高三千メートルの山に行くのでしょうか。自分の足で山道を登り、ようやく頂上にたどり着いて、そこにしか咲いていないその花をこの目で見たとしたら？ 写真では「イメージ」だったその花が、いまは手を伸ばせばふれられる距離にあります。咲く花の持つて

いる力が、写真で見るとは比較にならない現実感で伝わってくることでしよう。このように現実感をともなつて、ものごとを感じる心が、「体験する」ということです。

先輩宇宙飛行士である毛利衛さんから、おもしろい話を聞いたことがあります。そのころ僕はまだ宇宙に行ったことがなく、毛利さんは二度目の宇宙飛行から帰ってきたところでした。

②「地球を見ながら、ふつと思ったんだよ。糸でつながれているんじゃないかなって」

と毛利さん。

「それでね、思わず地球を見直してみたんですよ。地球をぶら下げている糸がないかどうか。周りをよく見てみたんだけど、やっぱり糸になんてつながってないんだね」

毛利さんははじめにそう言って、につこり笑っていました。

地球が糸でつり下げられていないことぐらい、常識中の常識です。二回も宇宙に行った人が何を言うんだろう？ そんなこと当たり前じゃないか、と僕は思っていました。

ところがその後、僕自身が、実際に宇宙に行ってみたら、なぜあんなことを毛利さんが言っていたのか、よくわかったのです。

地球を目の前になると、不思議なことに僕も同じように思いました。「これ、誰かが作って回しているんじゃないかな？ 本当に、浮いているのかな？」と。

果てしなく広い漆黒の宇宙空間のなかに、ぼんと浮かんでいる地球の姿はあまりにも完璧にみえました。だから、かえって信じられないような気さえしてきて、目を凝らしてしまうのです。

地球が宇宙に浮かぶひとつの星であること、それが青く丸いこと、自転

していること……。当たり前だと思っていたそれらのことを、もう一度自分の目で見て問い直そうとしてみる。それが、宇宙から地球を見たときに僕の心に起きた現象なのです。

③ こういう経験は、宇宙に行かないとできないわけではないと僕は思います。なぜならば僕たちの世界は、疑問と発見にあふれている場所だから。どんな日常も、見方ひとつで「なぜだろう？」「不思議だな」と感じられる日々に変わるはずですよ。

情報過多の現代社会では、Xともすれば体験することよりも知ることのほうに重点が置かれがちです。私たちの日常生活は、情報との格闘だと言っても過言ではないでしょう。日々、膨大な量のニュースが更新されて耳に入ってきます。インターネットを利用すれば、知りたい情報はほとんど手に入る、とても便利な世の中です。

便利とはいえ、気をつけなくてはいけないこともあります。慣れてしまふと、いつのまにか、見聞きするだけでなにかもを理解しているような気になってしまうからです。

知っているつもりになったとたん、世界は未知のものではなくなってしまう。それは錯覚にすぎません。本当は、知らないことや経験したことのないおもしろいことはいっぱいなのです。表面的な知識を身につけただけで満足するのは、もったいない。

④ 情報に溺れるうちにいつのまにか臆病になってしまふ、ということもあるのではないのでしょうか。心が「なぜ？」と問いかけることがあれば、好奇心を育てて、自分の目や耳、手足で確かめてほしい。誰かの情報をあてにするより、五感を使って感じてほしい。それには行動力も必要だし、勇気も必要です。それをいとわず、恐れず自分で行動を起こせば、世界は何百倍もおもしろくなるはずですよ。

先ほど例にあげた、高山植物の写真を見るときと、実際に高山に登ってその花を目にすることの違いの背景には、労力の差があることも忘れてはいけません。

山に登るには体力も時間も使います。撮影された写真を見るほうが、はるかに簡単で、効率もよいでしょう。しかし、効率性だけでものごとを判断するのはよくありません。これはなにごとにも言えることです。あまりに効率を優先させていくと、成績やスピードなど、数字で表される評価ばかりを追いかけていくことになってしまいます。そして数字だけを追っていくと、大切にすべきことや、自分自身の正直な気持ちまで見失ってしまうことがあります。

もしも大切な何かを見失っているような気がしたときは、「これでいいのかな？」と自分自身に問いかけることを恐れなくてください。「これではよくない気がする」と思ったら、その気持ちを見過ごさないでください。そして、悩みは始めるべきです。

悩むのは悪いことではありません。⑤ 自分の心に起きた違和感を無視するよりもずっといい。立ち止まって考えることにこそ、意味があります。壁にぶつかったときに支えとなってくれるのは、「自分で悩み、苦しみながら考えた」という経験です。たとえ明確な答えは出ずとも、悩んだプロセスは糧になります。その回数が増えるほど、生き抜く力がついてくる。僕は思っています。

【野口聡一「宇宙少年」】

問い一 A・B に当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ選びなさい。

ア なぜなら イ しかし ウ そのため
エ たとえば オ それとも

問い二 線X「ともすれば」、Y「プロセス」の意味として適当なものを、次のア～エから選びなさい。

X ア しかしながら Y ア 過程
イ 場合によっては イ 時間
ウ 残念ながら ウ 努力
エ もしかすると エ 現実

問い三 線①「そこに行かないと見えないもの」について

(1) それは、どのようなことを感じさせてくれますか。本文中から二十字以内でぬき出しなさい。
(2) (1)が伝わってくるような体験を、筆者はどのように説明していますか。本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問い四 線②「地球を見ながらくじやないかなって」について、なぜこのように思ったと筆者は考えていますか。本文中の言葉を用いて四十字以内で答えなさい。

問い五 線③「こういう経験」とはどのような経験ですか。本文中の言葉を用いて、四十字以内で答えなさい。

問い六 線④「情報に溺れる」とは、ここではどういうことですか。

もっとも適当なものを次のア～エから選びなさい。

ア 望む情報がすぐに手に入ること、日常生活において疑問を感じることがなくなること。

イ 簡単に手に入る情報によって、実際に体験したことではないのに知っていると思いつくこと。

ウ 与えられた情報を疑わずに、それ以上の情報を探して手に入れようとはしなくなること。

エ 多くの情報が手に入ること、本当に必要な情報が見つけないで混乱してしまうこと。

問い七 線⑤「自分の心に起きた違和感」の説明としてあてはまるものを、次のア～オから二つ選びなさい。

ア 労力よりも効率化を重視してものごとを判断していくこと。

イ 大切にすべきことや自分自身の正直な気持ちを見失っている気がする。

ウ 自分自身に問いかけたときに、これではよくないと思うこと。
エ 壁にぶつかったときに悩み考えることをあきらめてしまうこと。

オ 立ち止まって考えてみた結果、明確な答えが出てこないこと。

問い八 本文の内容として正しいものを、次のア～オから二つ選びなさい。

ア 地球が青いことはすでに知られているので、現代に生きる人たちがガガーリンのように宇宙で感動することはない。

イ 写真ではイメージでしかない高山植物を実際に見る事で、より自然を大切にしようという思いが強くなる。

ウ 日常生活は視点を変えることで、すでに知っている物事に対して疑問を持つことができる。

エ 疑問に思ったことを実際に自分で経験することは効率的とはいえないが、生きる力につながる。

オ 悩みながら何度も考えることで、人は正しい答えにたどりつくことができる。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

敬語はもともと言葉の被せものです。包み紙で包んで、見栄えを良くしたり、上品さを エンシュツ^a するようなものです。伝わるということだけでいえば、敬語を使わないことが一番通じやすいのです。二重敬語も敬語連続も日本語のしくみとしては間違っているわけではありません。しかし銀メッキの上に金メッキをするように、敬語の使いすぎは問題だということとです。

「先生を招く」だけで伝えたいことは十分なのに、

「先生をお招きする」

「先生をお招きします」

「先生をお招きさせていただきます」

と被せを何枚も重ね、メッキが厚くなってしまします。すると情報の コツ^b カク^c がわかりにくくなり、伝わらなくなります。

二重敬語を使うなら別の敬語を使う工夫をすべきです。

「食べられる」

のように、「れる／られる」を使うと尊敬語になりますが、「れる／られる」は 1 や 2 の意味を表しますので、誤解される恐れもあります。それに「れる／られる」は敬意があまり高い言い方ではありません。それで、「お食べになる」

と「おくになる」の形にし、さらに高めて、

「お食べになられる」

にしてしまうと、過剰敬語になります。

それよりも、「食べる」の尊敬語を使って、

「召し上がる」

四 次の言葉の反対語を漢字で答えなさい。また、その反対語と関係のある言葉を、次のア～カからそれぞれ選んで答えなさい。

- 1 絶対 ↑ ↓ □ □ 2 結果 ↑ ↓ □ □ 3 束縛 ↑ ↓ □ □
4 樂觀 ↑ ↓ □ □ 5 受動 ↑ ↓ □ □

- ア 自由 イ 長所 ウ 動機
エ 主体 オ 心配 カ 比較

と言うほうがすっきりします。

「寝る」「着る」「見る」など音節が短いものには敬語 コユウ^c の言葉があり、

「お寝になる」ではなく、「3」

「お着になる」は「4」

「お見になる」は「5」

などと言い換えられます。

このようにシンプルに表現することで、動作の主体を高め、言いたいこともきちんと伝わる日本語になるのです。

【北原保雄「勘違いの日本語、伝わらない日本語」】

問い一 線 a～c のカタカナを漢字に直しなさい。

問い二 線「敬語はもともと言葉の被せものです」は比喩表現です。

本文では「敬語」を他にどのようなものにとえていますか。二つぬき出して答えなさい。

問い三 1・2 にふさわしいものを、次のア～カから二つ選びなさい。

- ア 仮定 イ 受け身 ウ 丁寧
エ 意志 オ 禁止 カ 可能

問い四 3・5 にふさわしい言葉を、それぞれひらがなで答えなさい。

五 次の A～E のことわざ・四字熟語の組み合わせの中には、それぞれ一つずつ、□ に性質の違う漢字・言葉が入るものがあります。その番号を答えなさい。また、そのことわざ・四字熟語の意味を次のア～ケからそれぞれ選びなさい。

- A 1 □ 筆を選ばず
2 泣く子と □ には勝てぬ
3 □ に説法
4 □ の泣き所
B 1 □ の不養生
2 餅は □
3 □ 多くして船山に登る
4 □ の川流れ
C 1 □ 眠 □ 休 2 □ 業 □ 得 3 □ 体 □ 命 4 □ 我 □ 中
D 1 □ 心 □ 乱 2 □ 石 □ 鳥 3 □ 差 □ 別 4 □ 人 □ 脚
E 1 □ 同 □ 異 2 □ 名 □ 実 3 □ 機 □ 変 4 □ 意 □ 達

- ア 一つのこと集中する。
イ 意見が一致する。
ウ 心を奪われただけ行動するだけになる。
エ 名人でも時にしくじることある。
オ 正しいことを主張してもそれが通らない。
カ 何事も専門家にまかせた方がよい。
キ その場の状況に応じて適切な対応をする。
ク 危ないところをかるうじて助かる。
ケ 追い詰められてどうにもならない状態。

国語解答用紙

受験番号

氏 名

--	--

[illegible][illegible]

問 い 四		問 い 二	問 い 一
5	3		a
		問 い 三	
			4

四

記号	漢字
1	1
2	
	2
3	
4	
	3
5	
	4
	5

五

意味	性質の違うもの
	A
	B
	C
	D
E	